
カガク部！

タカシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カガク部！

【Nコード】

N12600

【作者名】

タカシ

【あらすじ】

えー、はじめまして、こんにちは。私は科学部一年の北村美代^{みよ}です。

私たち科学部は、この学校を悪の魔の手から守るため、日夜発明に勤しんでいます。

メンバーは、怪光線を発射する銃ばかり造る二年生と、自分の発明品に変身機能を必ず付けたがる三年生、打倒早乙女博士と叫びながら巨大ロボットを作り続ける一年生など、個性豊かで勝手気ままな人ばかり。

これから始まるお話は、そんな私たち科学部の、騒々しい活動の記録です。

※最初に言っておきますが、一話出来ることに投稿しているので、更新スピードはかゝなり、遅いです。

オープニング

PR活動

えー、はじめまして、こんにちは。私は科学部一年の北村美代です。私たち科学部は

〓〓以下略〓〓

これから始まるお話は、そんな私たち科学部の、騒々しい活動の記録です。

「こんな感じでよろしいでしょうか、先輩？」

「うーんと、どれどれ……………」
し、OK！ カンペキ！」

「ありがとうございますー！　じゃあ明日、放送部のここに持っていきますね♪」

「ちゃんとMDに焼いておくんだぞ」

「はーい♪」

「ちよつとまってえええええい！」

「なんだいロボ子ちゃん？　突然大声を出して」

「『なんだい』じゃありませんよ！　二人とも、なに勝手に他人の名前使って部員募集のデモテープを作ってるんですか！　そんな事に変声機を使わないで下さい！　あと、私の名前はロボ子では無く

美代です！」

「いいじゃないか別に」

「そうそう。減るもんじゃなし」

「減りはしないけど下がるんですよ！ 私の好感度が！」

「やれやれ、またバカなことをやってるわ」

「まあ、今に始まったことじゃないですし。てゆうか俺、打倒早乙女博士なんて考えたことねえんだけど……」

「そうだったの？ あたしはてつきり………」

「てつきり何ですか！？」

「お二人はいつも楽しそうですねえ。付き合ってるんですか？」

「「だれが!!」」

「ははははは」

オープニング（後書き）

相も変わらずノンプランです。

第1話 カガク部 VS バイオ部 ？

一日の授業も終わり、味気ないホームルームが終わった午後。グラウンドは運動部の生徒で溢れかえり、校庭には下校する生徒達がちらほら。

そんな光景を視界の端に捉えながら、私は一人、乱れた息を整えながら部室へと向かっていた。

「あゝ、しつこかった」

女子ソフト部の勧誘を振り切るために十分間くらい走り続けていたんだから、そりゃ息も切れるよなあ……………。

五月だというのにまだ桜の咲き誇る桜並木。そこを抜けると、目的地である旧校舎……通称部室棟が見えてくる。

部室棟へ着くと、中から今までに聞いた事のない鳴き声が聞こえた。驚いて窓のほうを見ると、大きな黒い影が廊下をゆっくりと移動していた。

「また変なの造ってる……………」

アレはきっと、バイオ部の実験体か何かだろう。

「はあ、きっと私が処理しなくちゃいけないんだろうなあ」

どんな環境にも適応できる新しい生命を生み出す事に躍起になっているバイオ部は、時々さっきみたいな変な生物を造りだす。

そしてその処理は、決まって私の所属しているカガク部にお鉢が回ってくる。まったく。分の物は自分で片付けてほしいよ……。

部室へと向かって動かそうとした足がかなり重くなった私は、「私がアレを何とかしないと学校中……へたをしたら町中がパニックになるかもしれないんだ!」と無理矢理に自分を鼓舞してようやく歩き始めた。

* * *

「こんにちは……うっおあ!」

木造三階建ての旧校舎。その三階にある部室は、今日も窓を締め切って作業をしているようで、初めて来た日と同じ匂いが部屋中に充満していた。

「やは、遅かったじゃないか」

窓際の机で作業をしていたメガネを掛けた先輩が、くるりと向きを変えながら言った。その際、はたらく白衣が近くに置いてある試験管を床に叩きつける。

「また出費が……」

あの白衣によって破壊された備品は、これで今月二十五本目。過去の記録によると、最多記録は三年前の五十八本らしい。もう少し周りを見て行動してほしいものだ。

「どうしたの、浮かない顔をして？ お腹でも痛いのかい？」

「……なんでもないです」

どうせ言っても聞いてくれないだろうことは火を見るより明らかなんだ。無駄に労力を使う必要は無いよね。

「それより先輩、他のみなさんは？」

私の入っている部活動――カガク部のメンバーは、私を入れて六人。この学校の平均的部員数からしたら少ないほうである。

「哲也君は先生に呼ばれて少し前に出て行ったなあ。宮原君も。あと、安藤君が補習で遅れてくるとか何とか。残りは地下室にいるはずだよ」

「残りと言っても一人だけですけどね」

そう言いながら、私は地下の実験室に降りるために室内の一番奥の机へと向かう。

その机には試験管立てが置かれていて、それぞれに違った色の液体が入った試験管が七本立ててある。その順番を、赤↓緑↓紫↓ライトグリーン↓青↓黄↓ライトブルーの順に並ぶように差し替える。

ビー、という電子音がしたので足元を見ると、床がスライドし地下への入り口が現れる。

「それじゃあ、先輩。お先に失礼します」

そう言い残し、私は地下へと続く階段に足を踏み入れた。

「あいよ」

背後ではメガネ先輩がビーカー片手にひらひらと手を振って見送ってくれていた。

彼は私たちが地下に降りた後、この隠し通路を閉める役割を担っているのだ。

内側からでも閉められるらしいが、外の仕掛けまでは戻す事ができない。それに留守番も必要だ。

『メガネ先輩が残されてるのって、地下の物を壊させないためらしいよ』

楽しそうに種明かしをした同期の部員の話を思い出し、自然と頬が緩むのを感じながら、私は階段を降り続けるのだった。

カガク部 vs バイオ部？

額に浮かんだ汗が周囲の汗と合体し、自らの重さに耐え切れず流れ落ちてくる。

そのほとんどが鉢巻に吸収されるんだが、ごく稀にしわの間を通り抜ける奴がいる。

そしてそれは決まって俺の目に入ってくるのだが、これがまた痛い何のつてもーたいへん。

「……あっちなあ」

カガク部員が一人、俺こと千葉勝彦^{ちばかつひこ}は、薄っすらとした地下室で一人、実験を繰り返していた。

地下室と聞くと、じめじめして薄暗い所を想像するだろうが、ここ『カガク部・地下実験室』はそんな生易しい場所ではない。

まず、窓が無い。これはまあ、一応地下だから納得できなくも無い。

次に空調設備が古い。記録によると、空調が設置されたのはカガク部が発足された次の日らしい。だいたい一五〇年ほど前だな。

この空調機、二、三〇年ほど前から調子が悪くなり、一時間しか

使用できなくなってしまったそうだ。しかもこの空調機、空気の入れ換えはするのだが、それと同時に自機の熱で地下室をサウナにしてみよう。脱水症状で病院に運ばれた部員が過去に何人もいるらしい。

そして最後、それはこの地下室が狭い事だ。

カガク部の部員は、俺を入れてたったの六人とこの学校では少ないほうだが、この地下室、五人全員が入る事ができないのだ。そのため、誰か一人は外に出ている必要がある。しかしそれでも五人は結構きつい。

そのうえ、その五人中三人はそれぞれ違う実験をしているのだから性質が悪い。ただでさえ狭いのに、皆がみんな違う事をしていたらもっと狭くなる。

結果、空調機の発熱作用も重なって、地下実験室は煉獄の間と化すのである。

「しかし一人でも熱いんだよなー」

眼をこすりながらばやいていると、室内に心地よい風が吹き込んできた。

「ふー」

吹き付ける風が体中の汗を乾かしていく。生き返るー。

「こんにちはー、って暑！」

風とともに入ってきたのは俺と同じ時期に入部した女子生徒、北^き村^{たむら}美^{みよ}代^{みよ}だった。

中学の頃は運動部だったという北村は、やや日焼けの残る健康的な肌の少女だ。俺より頭一つぶん背が高く、おまけにスタイルもいい。中学では運動部だったらしいその体は一般の女子より幾分か引き締まっており、無駄な肉など一つとして無い。

……テニス部とかに入っていれば、二年後の今ごろは美少女プレイヤーとか言われてもてはやされていただろうに。

そんな彼女がどうしてカガク部に入ったのかは、今のところまったくの謎だ。

「やつほー、千葉くん。ここはいつ来ても暑いねー」
「ま、地下だから」

俺の姿を見つけ近づいてきた北村と、もはや決まり文句となりつつある挨拶を交わす。

「今日はなに作ってんの？」

俺の手元を覗き込みながら北村が聞く。

「ん？ まあ一言で言っちゃまうと『スーパ―防護服』だな」

「スーパ―……プツ、ダッさい名前」

「うるせー」

「だってスーパ―よ。……プツ。今どきちょっと古くない？」

「そんなの分かってらい」

俺だって、自分のネーミングセンスの無さは自覚している。それに『スーパ―防護服』という名前も決定版じゃない。完成後にカガク部の皆で決めようと思っているんだ。

「でもそれほんとに防護服？」

作業中の手元を凝視しながら北村は言った。

「……なんだよ。なんか文句でも？」

俺が細心の注意を払って二時間以上続けているこの作業を馬鹿にされた気がして少々むっときたので、無意識に棘のある言葉で返す。

「いや、だってそれ……………セーターじゃん」
「セーターゆうなああああああ！」

即答、いや即叫そっきょうだった。

「セーター言うなっセーター！ 俺の使ってる編み棒だけ見てセーターって決め付けるな！ だいたいどいつもこいつも、俺が休み時間返上で編物してるのを見て冷やかすだけ冷やかしてがんばれの一言もかけてくれないし！ 別にそんな事が言われたいからやってる訳じゃないけどさ！」

半ば自暴自棄になって叫び続ける俺を「どうどうどう」と言っ
て落ち着かせようとする北村。十分後、ようやく落ち着いてきた俺は、水筒のお茶を飲み、とりあえず事情を話す事にした。

「で、いったい何があったのさ？」
「じつは……………」

＊ ＊ ＊

昨日の夕方、俺は昆虫同好会に入っている友人の所を訪ねた。簡単な挨拶を交わし、しばらく雑談などをしていたとき、友人が思い出したように言った。

「そういえばカッツン。頼まれてたあれできたぜ」

そう言っで立ち上がると、保管庫――虫の餌などを入れとく大きな箱――の前まで行き、がさごそと漁ってその中から一抱えほどの瓶を持ってきた。

「ほらよっ……と」

机の上にトンと置かれたそれは、一週間ほど前に昆虫同好会の部長に掛け合っで頼んだものだが、俺自身そのことを忘れていたので初めのうちはそれが何かわからなかった。

「いやもー大変だったぜー」

苦労話を始めた友人を華麗に無視して、俺は机の上の物体をガン見していた。

「どうだ？」

「……問題ない。協力感謝する」

今後の作業プランを立てながら、礼だけ言って瓶を抱え出て行った。

「アイツってもちーと愛想良くできないのかねえ……」

友人の呟きは昆虫たちだけが聞いていた。

＊ ＊ ＊

「それから家に帰った俺は―――」

「ちよっと待って！ その材料って一体何なの！」

ことの始まりを話し始めると、北村がもの凄い勢いで質問してきた。なんだよ、これからが大事だっていうのに。

「ねえ、材料って何なの！」

「……何って、蜘蛛の糸だよ」

しかたなく答えてやった。

「ク、クモ……………」

「そう、クモ。スパイダー。しかも絶滅危惧種に指定されててなかなか手に入らない品種のやつなんだ。どうやって昆虫同好会が入手したのか分からないけど、ようやく手に入ったんだ。これで俺が作

りたかったものが作れるんだから、そんな事いちいち気にしてられるかっておい聞いているのか？」

北村からの反応が無い。

「おい、どうしたんだよ急に黙りこくってえええええ！？」

隣にいるはずの北村が、白目をむいて気絶していた。

「おい！ 大丈夫か！ しっかりしろよ！ 起きろ！ 寝たら死ぬぞ！ 北村！」

肩を掴んでガクガク揺らしたり、頬をペシペシと叩いてみたが何の反応も無い。……一体どうしたってんだ？

考えたって答えが出てくるわけでもないの、俺は北村を抱えると部屋の隅の長椅子に寝かせてやった。そして何事も無かったかのように俺は作業を再開した。

* * *

「ういゝっす」

部室のドアを辛気臭そうに開けて入ってきたのは、副部長の宮原^{みやば}沙耶^{さやか}加^かだった。

「やは、これはまた一段と辛気臭い顔で」
「ああ？」

他の三年女子よりも幾分か幼い顔を、酔っ払いのオヤジみたいに歪めて唸る。

「その様子だと、また何か厄介ごとを押し付けられたようで？」
「ああ。またバイオ部の奴らが作ったバケモノを退治しろってさ。これが辛気臭くならずにいられるかってのよ」

えらく不機嫌な宮原は近くの椅子にどっかりと腰掛けると、全力を出し切り燃え尽きたボクサーのような体勢でため息をつく。

「またですか。大変ですね」

メガネを拭きながらそう返すと、重いため息が返ってきた。

正式名称、バイオテクノロジー研究部ことバイオ部。昨年までは二年生二人で同好会として活動していたが、今年に入って三人の一年生が加入したため正式に部活扱いとなった。

主な研究内容は、「荒廃した土地でも強い繁殖力を持つ新たな生命の誕生」とかそんな感じだったのだが、代が変わるにつれてあいまいになっていき、現在は「強い繁殖力をもった新たな生物の誕生」となっている。

「あの迷惑な部活、いつになったら廃部になってくれるのかしらね？」

顔に似合わず棘のあることを言う宮原副部長。

「生徒か教師が何人か捕食されればいいんじゃないでしょうか」

アルコールランプに火をつけながら無責任なことを言う自分。だって他人事だし。

「いやいやいや、既に十人くらいの生徒が被害に遭ってるらしいのよね……」

「へ」

「だから早急に対処するべしって言われちゃったのよ。まったく、相手するこっちの身にもなれっての！」

「まあまあ、そう言わずに……」

机の引き出しからお茶菓子を取り出し、アルコールランプとビー

カーで淹れた紅茶を手際よくカップに注ぐと、流れるような動作で宮原副部長にお出しした。我ながら見事な手際だ。

「まあ、これでも飲んで少し落ち着いてください」

「お、サンキュ」

カップを受け取った宮原君は、そのまま口元に持っていきいきにグイッと飲み干した。

……風呂上りのオッサンみたいだなあ。

「熱っ!!」

「そりゃそうでしょうね。淹れたてですから」

これが鉄也君なら、「口の中が火事だ! 誰か消火器! いや消防車!」とか言って騒ぎまくるんだろうか。

「それで、これからどうするんですか?」

「うーん、正直言うとめんどくさいんだよな、これ。でもうちがやらなきゃどこもこんな事しないだろうし……………」

幼い顔立ちのわりに長くてほっそりとした足を組み、今度は『考える人』のポーズを決める副部長。こめかみを押さえて考え込む姿はとても絵になっている。次にこのポーズを見れたら、写真でも撮

って美術部や新聞部に売りつけよう。そのためにまず、カメラを買わねば。

そんなことを考えていたら、いつの間にか立ち上がっていた副部長が叫んだ。

「よし！ アレを使ってみよう！」

「アレですか？」

「そう、アレよア・レ。こないだ出来たばかりだからデータ採集もまだでしょう？ だったら渡りに船。面倒ごとと一緒に片付けちまおう」

そう言うと、先ほど美代君がしたように、部屋の奥にある机の上の試験管を手際よく並べ替え、地下室へと降りていった。

もうしばらくすれば、地下室から美代君たちが出てきて怪物退治に出かけるだろう。

「では、その前にお茶でも淹れてあげるとしようかな」

再びアルコールランプに火をつけると、ビーカーでお湯を沸かし始めた。

* * *

「美代！ それと勝彦！ いるんだろう！」

さして広くも無い実験室に、副部長の声が響く。

「なんですか沙耶加先輩？ そう大声で怒鳴らなくっても聞こえますよ」

今日は俺がせっせと編物に励んでいるだけだったので驚くほど静かなのだが、いつもはいろんな機械がガコガコ鳴っているから大声を張り上げないと自分ですら聞き取れない。

よって、今日のように静かだと、この部屋は一転して地獄の反響部屋と化す。

「あー、もう、三半規管に狂いが生じちゃいましたよ」

椅子から立ち上がろうにも足がもつれて上手くいかない。

ぐわんぐわんと頭の中にまで響いてきた声にはそれだけの威力があったという事だ。

「すまんすまん」

平謝りする沙耶加先輩。

「それで、今日は何ですか？」

先輩が開口一番に北村の名前を叫んだという事は、また何か厄介な事を頼まれたのだろう。

ちなみに、先週は吹奏楽部の部室になぜか大量発生したゴキブリの駆除をさせられた。

「Bよ」

「Bッスか……」

Bというのはもちろんバイオ部のこと。

カガク部はバイオ部なら「B」、ミュータント部なら「M」、薬学部ならば「D」といったように、厄介事を持ち込む事の多い部活に呼び名をつけている。

「Bってことは、先月作り始めたっていうカニマジロくんでも逃げ出したんですか？」

「違う違う。てゆーかなによ、カニマジロくんって？」

「えーと、たしか『カメとカニとアルマジロを足して割った地球一硬い愛玩動物』とかなんとか……」

なんでもバイオ部の部長が、

『カニマジロくんが完成したあかつきには、ペットの主流であるイヌやネコ達はみーんな保健所行き決定だぜい！』

と息巻いているところを、たまたま通りかかった俺の友人が聞いていたらしい。

その話を耳にしたとき、俺は『鋏を振りかざしながらノロノロと横歩きするサッカーボール』を思い浮かべた。こんな動物誰も飼いたがらねえよな。

「いやいやいや、ぜんぜん可愛く思えんし！」

隣では、おそらく同じ事を考えていたであろう副部長が、ものすごい勢いで頭を振って浮かんてきたイメージを必死に振り払おうとしていた。

その風圧で俺の前髪がスパッと切れた。体中からいやな汗が吹き出てくる。

「あ、あの、沙耶加先輩？　大丈夫ですか？」

このままでは耳まで切られそうな勢いだったので、とりあえず落ち着いてもらう事にした。

「え、ええ……………」

先輩の両腕が動きを止めたのを見て安堵の息をこぼすと、俺はこれからするべき事を確認するための質問をした。

「それで、今日はなんですか？」

「あれ、この台詞ってさっきも言わなかった？」

「気のせいです、先輩。ザツ・イズ・デジャブ」

「……………そうかしら？」

腑に落ちない顔で首を傾げつつ、先輩はようやく話を進めた。

「実は……………」

それから三十分後、俺たちが校内中を走り回る羽目になるとは、この時点では夢にも思っていなかった。

カガク部 vs バイオ部？

「なんなのよも〜！」

私たちは現在、音楽室のピアノの下に身を潜めていた。

「俺、が、知る、か！」

すぐ横では、同じように四つん這いになっている千葉くんが、酸素を求めてゼイゼイと喘いでいる。

「なによあれ！ 私が見たときよりも三倍はデカくなった！」

「なになって、おまえ、バイオ、部、が、作った、生物、だろ」

「そんな事は分かってるわよ！」

疑問なのはどうしてあんなにおっきくなっているのかという事だ。

今日部室に来る途中で見かけたときは人間サイズだったはずなのに、さっき廊下で対峙したときにはその何倍にも膨れ上がっていた。

「私あーいう気持ち悪いのダメなのよね……」

私は自分の体を抱くようにして震え上がった。そうなのだ。昔から私はイソギンチャクとかムカデとかゲジゲジとか、そういった足（触角も含む）の数が異様に多い生物を見ると全身に鳥肌が立ち、酷いときには蕁麻疹が出る事だってあるほどに苦手なのだ。その反面、ゴキブリやクモ、ミミズなど他の人だとギャーギャー喚くような生物は全く平気だったりする。

「私今回はパス！ 後よろしく！」

そう言って逃げ出そうとピアノの下から這い出る。

千葉くんには悪いが、今回ばかりは私、何にもできそうに無い。何もかもを投げ出して今すぐ家に帰りたいくらいだ。

「お、おい！ 北村！」

千葉くんの制止も聞かずにドアに向かって走り出す。

ごめんね千葉くん。でも私、今回だけは本当に無理なの！！

顔を伏せ一直線に走る私。そんな私に、千葉くんは必死になって何かを伝えようと叫んだ。

「北村！ 前！ 前！」

「え？」

瞬間、私の頭上に影が差したかと思うと、顔を上げるより早く強烈な衝撃が腹部を襲った。

「かつは！？」

景色がものすごいスピードで流れていく。自分の体が後ろへ吹き飛ばされているからだということに気づいたのは、譜面台やらを巻き込んで壁に激突した時だった。

「きゃあああ！！」

譜面台にぶつかることで勢いが弱まったのか、壁にぶつかった割には痛みは少なかった。

「北村！」

ピアノの下から這い出て私の方へと駆けてくる千葉くん。今まで見たこともないくらい悲痛な表情をしている。

「大丈夫か！」

「あんまり……大丈夫じゃ……ないかも……」

起き上がろうと力を込めると、お腹に鈍い痛みが走る。

「いったい何が……」

眩きながらドアの方を見ると、そこにはウネウネお化けがどつしりと立って(?) いた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

サーッと全身から血の気が引いて顔が真っ青になっていくのが、鏡が無くて分かった。

「何……あれ……」

あいつの体から丸太のように太い棒が四本、枝のように生えてい

た。

さっきまでは無かったのに……。

「たぶん、触手(?)を何本も束ねて作ったんだろうな。見ろ、あれだけあった触手がどこにも無い……」

そう言われてみれば、確かに無数にあった触手(?)がどこにも見当たらない。どうやらさっきはあれに殴られたようだ。

「まずいな……」

忌々しげに呟く千葉くん。しかし千葉くん、いつの間に元気になったんだろう？

「奴は太いしっかりとした触手を作って攻撃力を補ったんだ。くそっ。イソギンチャクみたいな姿のくせに、無駄に知恵を付けやがって……」

千葉くんが悪態をついている間にも、アイツは邪魔な譜面台や椅子を例の太い触手で薙ぎ払いながら近づいてくる。

うーん確かに、さっきまでの細かった状態で殴るより、今の太い状態で殴ったほうがはるかに痛そうだ。でも……、

違いだったの。

「触手の無いイソギンチャクなんて、ただの濡れ粘土に過ぎないのよ！」

———恐れるものは何も無い！

走り出した私は、ブレザーの内ポケットから手のひらサイズの筒状の物を取り出し、目の前で一振り。カシヤカシヤツという小気味良い音と共に筒の先が伸びて一本の棒になった。お巡りさんが持っている警棒と同じ原理で作られたこれは、製作No. 一二〇四『のびのびスティック・S』。

「いくわよ！」

自分の武器を握り締め、濡れ雑巾に突撃する。陸上で鍛えた脚力で一気に間合いを詰める。

けれど、簡単にはいかないのが現実。

「北村！ 右だ！」

千葉くんの声に咄嗟に身を屈めると、頭の上をブォンッってな感じで何かが通り過ぎた。考えるまでも無い。濡れ雑巾の丸太に決まっている。私に懐に入られまいと、丸太を滅茶苦茶に振り回し始めたのだ。

「ござかしい!!」

しかし、バトミントンで鍛えた動体視力と反応速度で、迫り来る丸とを次々と回避。あつという間に懐に入ると、のびのびスティックを力の限りに突き刺した。

え？ 警棒は普通突き刺したりしないって？

確かにそうだろうけど、これは普通の警棒じゃない。なんてったってカガク部が作った物だ。損所そこらの警防とは一味も二味も違うのよ!!!!

「スパーーーーーーーク!!!」

そう叫んで、柄に埋め込まれたスイッチを押すと、スティックから発生した超高压電流が濡れ雑巾を襲った。

＊ ＊ ＊

「スパーーーーーーーク!!!」

あれだけ怯えていた北村が突然復活したと思ったら、あつという間にイソギンチャクを黒焦げにしてしまった。

俺はとんでもないものを見たんじゃないか？

今自分が見た光景は、それくらい信じがたいものだった。

「いやー、終わった終わった」

そんな事を言いながらこっちらへ歩いてくる北村。その足取りには、掃除が終わったあとの開放感に似た雰囲気を感じられた。

「お、お疲れ……」

とりあえずそう言うておく。だって他になんて言えбайいんだよ。

「じゃあ、沙耶加先輩に連絡するか」

仕方が無いのでミッション終了の報告をすることにした。

ベルトに着けてあるホルダーから携帯電話を取りだし、ショートカットキーを押して沙耶加先輩のケータイへ電話を掛ける。

「もしもし、先輩？」

《ああ。なんだ勝彦、仕事は終わったのか？》

「はい、ついさっき。ターゲットは音楽室で真っ黒焦げですよ」

《そうかそうか。で、例の物はうまく使えたか？》

「例のもの？」

.....あっ!!

慌ててポケットを探ると、黄色い紙に包装された小さな箱が出てきた。

《どうやら忘れていたみたいね》

「い、いや、別に忘れていたって訳じゃなくて……」

そう、渡すタイミングが見つからなかったんだ。本当はイソギンチャクを見つける前に渡しておくつもりだったけど、あっという間

に見つかって追い掛け回されたので渡しそびれていたただけなんだ。
……本当だよ？

《まあいいわ。別に急いで完成させなきゃって訳でもないしね》

「……すみません」

《だからもういいって言ってるでしょう》

「でも……」

《あんまりしつこいとアンタを実験台にするよ》

げっ!？

それは勘弁してほしい。

《それより、誰か怪我した人とかはいないわけ?》

「ええっと、北村がいくらか怪我をしたくらいです」

あんな太い触手で殴られたんだ。後で医者に診せた方がいいと思う。
……本人はピンピンしてるけどな。

《それだけ？》

「はい」

俺は走りすぎて疲れただけだし。そもそもここには俺と北村しかない。ほかに誰が怪我をするって――

《なら、襲われた生徒たちは全員無事だったのね》

——ゆうんでええええええええええ！！！！！！

「せ、先輩！」

《ん？
どうしたの？》

「教われた生徒たちって、生きてたんですか？」

《さあ。教われたところを目撃した生徒によると、どうやら丸呑みにされたらしいのよね。でも怪我人がいないんならその生徒たちも無事ってことでしょ?》

「な……」

なんてこつたあああああつ！

「あ、あの、あのあの！！」

《落ち着きなさい勝彦。あんたキャラ変わってるわよ》

これが落ち着いていられるかっつっ！！

《いったいどうしたのよ、気持ち悪い》

それが……それが……

「美代が中の生徒たちごと高圧電流あびせちゃったんですよおお
！！」

沙耶加先輩の叫び声は、電話越しに北村まで届いたという。

その後また一騒動あったことは言うまでもない。結果的に死傷者が一人も出なかったのは奇跡だと言って良いだろうな。

……沙耶加先輩、ああいうことは先に言ってください。

カガク部 vs バイオ部 ? (後書き)

【本日の発明品、大・解・説！】

北村 「本日の作品はこれ『のびのびスティック・S』！」

千葉 「って何だこのコーナー！？」

北村 「いやいや、さっき部長から電話があって……」

部長 『新しい武器は番組の最後に補足説明するのが王道だあああ！
！』

北村 「と」

千葉 「そうか」

北村 「ええ！？ 納得しちゃうの！？」

千葉 「それより、どうして俺たち二人だけなんだ？」

北村 「それは、宮原副部長が……」

宮原 『そういう裏方的な仕事は下っ端がするもんなのよ』

北村「と」

千葉「なるほど」

北村「だからなんで納得しちゃうの!？」

千葉「ならさっさと終わらせて帰るぞ北村」

北村「う、うん。そうだね、ちゃっちゃと終わらせよう」

千葉「という訳で、駆け足で説明するからしっかりついて来るんだぞ？」

北村「誰と話してるのよ……」

千葉「さてさてこのスティック、ぶっちゃけて言えば【電気の流れる警棒】だ」

北村「スタンロッドとも言うわね」

千葉「ああ。だがこいつはそこいらのスタンロッドとはわけが違う。流れる電流は市販品の二十倍以上! 法律的にも人道的にもアウトなこの威力は、グリップに埋め込まれたカガク部特製超小型バッテリーによるものだ! その最大出力は、一県の電力を補えるくらいだという!!!」

北村「そんなものを持たされてたのか……」

千葉「だから絶対に人には使用しないでくれ。お兄さんとの約束だ

ぞ？
」

北村 「だから誰と話してるのよ！！」
」

第2話 カガク部 vs 女子ソフトボール部？

現在午前十二時二十五分。

四時間目の授業がもう少しで終わるといふこの時間、私たち一年C組はグラウンドでソフトボールに興じていた。

今日の二時間目は体育の授業で、六月に行われる学校行事『校内スポーツ大合戦』最強クラスはどこだ！』に向けて、競技種目であるサッカー・バレーボール・バドミントンの三競技に出場するメンバーを振り分け練習する予定だった。けれど、担当の体育教師が、

「メンバーの振り分けが終わったら好きにしていぞ。オレはその辺で休んでるから、何かあったら呼んでくれ。んじゃ」

と言ってどこかへ消えていったので、こうやってまったく関係の無いソフトボールに興じているわけである。

「無責任にもほどがあるよ」

そう呟きながらバッターボックスに立った私は、相手チームのピッチャーをなんとなく見た。

「やれー」とか「打たせてこー」とかいう声が飛び交うなかで、

彼は目を閉じ深く深呼吸し、ゆっくりと目を開く。

男子チーム対女子チームで行われている試合は、現在六回裏、五対四と男子チームがリードしている。でも、

「いけー！ 北村さーん！」

「この回で追い越すわよ！」

「死んでも塁に出なさい！！！」

「決着を付けちゃえー！」

とまあ一発逆転の大チャンスなのである。具体的にはツーアウト満塁。デットボールやフォアボールでも同点になるのだが、チームメイトはそれを良しとはしないだろうな。

「まったく無茶ばかり言うんだから……」

そんな事を考えていると、ピッチャーが投球モーションに入った。呼吸を止めバットを腰の位置まで下げると握る力をほんの少しだけ緩める。放たれたボールの軌道に合わせて下から振り上げるイメージでバットを振りぬく。インパクトの瞬間にバットを強く握り締めたのは、昔剣道を習っていたからだろう。

カキーン

金属音が鳴り響き、白球は遙か彼方に飛び去った。

「
「
「
「キ
ヤ
ア
ア
ア
ア
ア
ー
ー
ー
！
！
！
」
」
」
」

[illegible]

女子チームは大歓声を上げ、男子チームは驚愕の声を上げる。ピッチャーなんてマウンドに膝を着いて放心状態だ。目を凝らせば彼の口から魂が抜けているのが見えるかもしれない。

ホームに帰還した私を、チームの皆が拍手で迎えてくれた。

「北村さんかっこいい」

「あんたならやってくれると思っていたわ！」

「お姉さまって呼んで良いですか!!」

何か変なのが混ざっていた気もするけど、こうして皆から褒められるのも悪くはないかな。

キンコーンカーンコーン

「ゲームセット」。八対五で女子チームの勝ち」

授業の終わりを告げるベルと共に先生の声が聞こえてきた。いつから居たの？ とかどこに行ってたの？ とか思ったら負けなんだろうな。

「んじゃ負けた男どもは後片付けして帰れよ」

それだけ言うと、先生はひらひらと手を振りながら帰って行った。

残された歓喜に踊る女子たちと、虚脱の渦に吞まれた男子たちは、一瞬の硬直の後、それぞれの目的地である教室と用具倉庫へとけて足を動かし始める。

男子チームには少々悪いことをしたかなーと思う。でも……

「勝ったほうが正義ってことで」

男子の諸君、女子を甘く見ないことね。

＊ ＊ ＊

カガク部にある地下実験室で、俺はスーパ―防護服の製作に励ん

でいた。完成度は四十パーセントくらいで今は丁度脇の辺りを作っている。

「ふう」

我ながらなかなかの作業速度だ。この調子なら今週中に完成するだろう。

一息ついて額の汗を拭こうと背もたれにかけてある学ランからハンカチを取り出す。この部屋に十分もいれば、学ランなんか必要ないくらいに暖まるのだ。室内に持ち込んだスポーツバッグから水筒を取り出し喉を潤していると、不意に肌寒い風が吹き込んだ。

「寒っ！」

「暑っ！」

室内に響く二つの声。お互いに正反対のことを言ったのはそれだけ温度差が激しかったからだろう。

「やつほー、千葉くん。ここは冬でもこの暑さなのかな？」

「たぶんな。地下だから」

お決まりの挨拶と共に入ってきたのは北村美代。寒いので早く入れと目で訴える。

「千葉くん、子供は風邪の子って言葉知ってる？」

「……俺を馬鹿にしてるのか？」

「千葉くんもたまには外で遊んでみたら？」

「大きなお世話だ。いいから早く入れ。寒いだろうが」

「はい」

オレの反応に満足したのか緩やかな足取りで入ってくる北村。

「お前もしかしてドS？」

「んー？ そんなことないよ？」

とぼける北村。その様子から、俺の中の疑いはますます強くなった。北村美代S疑惑……今後は注意しておこう。

北村が入り口を閉めて中に入ってくる。俺の正面に座った北村は、いつの間にか制服である紺のブレザーを脱ぎ、胸に校章が刺繍されたYシャツ姿になっていた。よっぽど暑かったのかYシャツのボタンを二つほど外して、その隙間からは

意外に大きな胸の谷間が……

「!?!?!?!?」

待て待て待て待て!!

これ以上はダメだ。人としてダメだ。同じ部活の仲間をそんな目で見るなんて万死に値する行為だ。俺はそんなゲス野郎じゃない。

俺は慌てて視線を逸らし強引に作業を再開した。しかし、人間の欲求はかなり強いらしく、気を抜けばすぐにでも視線が持っていかれそうになる。

「……ねえ千葉くん、今あからさまに視線逸らしてるよね?」

そう言って俺の顔を下から覗き込んでくる北村。

地下室の暑さのせいかな、わずかに蒸気し赤くなった頬と少しだけ潤んだ瞳。そんな顔で見つめたれたら、なんかもう、色々ややバイ。

「やっぱりお前ドSだろ!!」

疑いが確信に変わった瞬間だった。

「ところでさ、その左目どうしたの？」

「え？　左目がなんだった？」

「いや、正確には左眉の少し上の辺りかな。何かガーゼが痛々しいんだけど」

「ああ、これか」

言われて思い出したように左眉のガーゼに手を触れる。

あれは四時間目の終わり頃。机の下で内職に精を出していたとき、窓の外から飛んできたソフトボール用の球が俺の顔面を見事に捕らえた。俺は椅子から弾き飛ばされるわ内職が見つかってこってり絞られるわで散々な目にあったんだ。

事のしだいを話したら、北村は気まずそうに「ご、ごめん」と言っただけ黙りこんでしまった。一体どうしたんだこいつは？

「ま、いっか」

北村が静かになったので、俺は作業を再開した。これでやっと集中できる……そう思ったのもつかの間。今度は顔に貼られたガーゼが気になり始めた。さっきまでは気にならなかったのに、一度意識すると気になって気になって仕方がない。いっそ剥がしてしまおうかとそんな事を考えていたら、またもや肌寒い風が吹き込んできた。

今度は誰だよ。そう思い入り口を見ると、そこには

「美代！ 勝彦！ いるんだろう！」

体操着姿の宮原沙耶加福部長が、バットを肩に担いで仁王立ちしていた。

何で体操着？

* * *

北村君が地価に降りて行った後の部室で、僕は鉄也君から頼まれていた実験を再開した。

「ふんふんふふーん♪」

鼻歌を歌いながら右手に持った試験管の中身をビーカーに移す。

「博士は〜言っていた〜♪」

数回ビーカーを揺らすと、緑色の液体と最初から入っていた黄色

い液体が混ざり鮮やかな緑色に変わっていく。うん、怖いくらいに綺麗な緑だ。

「毒々しい色と〜♪」

机の引き出しから脱脂綿を取り出し、緑色の液体を浸してシャーレに移す。

「鮮やか過ぎる色には〜♪」

懷からマッチを取り出し火を付ける。火が点いたら緑に変色した脱脂綿の上へと持っていき、指を離す。3・2・1。

「気をつけなさい〜♪ っと」

ボンッ！ という破裂音と眩い閃光が部室を埋め尽くす。数秒後、脱脂綿が机ごと無くなっているのを確認すると、手元のファイルに結果を書き込む。

「うーん、ちょっと威力が強すぎたかな？」

粉々になった机を眺めながらそんな事を呟いていると、部室のド

アが乱暴に開け放たれた。

「ちょっと！ 何よ今の音は！」

血相を変えて飛び込んできたのは、体操着姿のカガク部副部長、
宮原沙耶加君だった。

「おや、そんなに血相を変えてどうかしたんでか？」

「それはこっちの台詞よ！ アンタいったい何作ってたのよ！ 外
にまで聞こえてたんだ
から！」

うーん。何と言われましても……

「爆発物ですが何か？」

「お馬鹿！！」

悪びれることも無く答えたたん、ズンズカ歩いてきた宮原君に
頭を引っ叩かれた。痛いじゃないか。

「爆発実験室内で行ってんじゃないわよ！」

「もっともなご指摘ありがとうございます」

この場に千葉君か北村君がいたら「突っ込むところそこじゃないですから!」と全力で否定したに違いない。怒り心頭の宮原君に事のいきさつを話すと、

「まったく。鉄也も鉄也だけどアンタもアンタよ」

そう言って言葉の鞘を収めた宮原君。そういうキミも相当なものだと思うが、とは口が裂けても言わない。誰だって命は惜しいものだ。

「で、今日は何があったんですか？」

さすがに爆発物の件だけであそこまで怒ったとは考えづらい。だとすれば、部室へ来る前に不機嫌になる何かがあったのだ。粉微塵になった実験跡地を掃除しながら聞いてみる。

「あー、ちょっとね」

帰ってきたのはなんとも歯切れの悪い返事。

「はー、これはまた厄介なことだ」

人事のようにそういった僕に、邪険な視線をよこす宮原君。

「そんな目しないでくださいよ。どうせ北村君絡みでしょー？」

「そ、そうだけど……。もっとう、『先輩も大変ですね』くらい言えないわけ？」

「だって他人事ですし」

「そうよね……。アンタはそういう性格してるんだったわね……」

諦観を声色に滲ませ溜息を一つつくと、宮原君は実におじさん臭い動作で立ち上がり地下実験室へと降りていった。

ところで、何で体操着を着ているのだろうか？

第2話 カガク部 v s 女子ソフトボール部 ? (後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

カガク部 vs 女子ソフトボール部？

「えー、私たちは現在、第二グラウンドに来ています」

私たちの学校には三つのグラウンドがある。一年～三年校舎に横付けされるように設けられたそれらは、この学園の財力の象徴の一つとして数えられている。

第二グラウンドは二年生の校舎に近く、放課後には野球部やハンドボール部が練習場として使用している。

あの後ろくなく説明も無いまま此処に連れてこられた私と千葉くんは、女子ソフトボール部（以下、女子ソフト部）の面々と向かい合っただけで並んでいた。

「あのー、沙耶加先輩。俺たちがこんなところで女子ソフト部の皆さんとメンチの切り合いをする羽目になっているのか、そろそろ説明してほしいのですが」

私の隣にいる千葉くんが宮原先輩に小声で訴えた。面倒くさそうな先輩の顔が見えたので、私も目線で援護射撃。

だってソフト部の人達から睨まれてるのって主に私なんだもん。居心地が悪かったらありやしない。

「あー、それは……」

「それは私から説明するわ」

先輩の台詞を掻っ攫っていった声の主は、女子ソフト部の先頭に並んでいた筋肉質な選手だった。

「北村美代さん」

そう言いながら私の前まで歩いてくる彼女の頭には、安全メット（ライト付）が装着されていた。

「土木工事のおばさん？」

千葉くんの呟きは聞かなかったことにしよう。

「簡潔に説明するわ」

目を血走らせて私を睨んでくる彼女。

「怖っ！」

うん、私もそう思うよ千葉くん。

でも悲しいかな。これから何を言われるのか、あの真剣な目を見たら分かってしまった。

「北村さん、貴方が欲しいの!!」

「ほらきた!」

「またかよ!」

この学校に入学してからというもの、耳にたこが出来るほど聞かされた言葉。そしてそれに同じような反応を見せた私たち。余りにも想像通りの言葉だったのでつい反応しちゃったよ。

……あれ?

「私、女子ソフト部の勧誘は以前断ったはずですよ?」

そう、入学して一週間くらいしたころ、うちのクラスに部員全員で押し掛けてきたことがあった。ソフト部の熱い眼差しとクラスメイトの冷ややかな眼差しの板ばさみにあって落ち着かなかったことを覚えている。

「ええ、覚えているわ」

「だったら何でまた？」

あれから一ヶ月以上も経っている。こういう部活なら進入部員とも打ち解けて、チームワークも揃い始めた頃だ。そこにわざわざ私なんかが入っていったら、それをぶち壊しかねない。

「大事なのは戦術よりも戦力です」

冷静にそう告げる安全メット。その言葉とは裏腹に、私に向けられる視線は驚くほど情熱的で輝いている。というか、彼女に限らず後ろに並んでいるソフト部員全員の目が同じように輝いているんですけど……。

「おーおー人気者だねえ」

他人事みたいに言ってるけどね千葉くん、今から起こることにキミも巻き込まれるんだよきつと。

「というわけで、これから私達ソフトボール部と勝負をしてもらいます」

「どいうわけだよ！」

「もしかしてそれ賭け試合？」

「はい。北村美代さん、貴方を賭けて」

その言葉を聞いて、私は人知れずため息をついた。

＊ ＊ ＊

ソフト部が提案した勝負内容は、女子ソフト部チームとカガク部チームに分かれて試合をするということ。カガク部チームは三人なので、足りない分の六人は女子ソフト部からレンタルすることになった。

ただし、これはあくまでもカガク部と女子ソフト部の勝負なので、カガク部チームの攻撃は俺、北村、沙耶加先輩の三人で行うこと。満塁のときはレンタルメンバーから代走を出すなどが話し合いにより決定された。

バッテリーボックスに立って数回素振りをした後、俺は相手のピッチャーを見つめた。キャッチャーがサインでも出しているのか、しきりに首を振っている。

「そんなマジにならなくても……」

こちららバットを握るのだって数年ぶりなんだぞ。ソフト部の投

げるボールなんてストレートでも打てる気がしないっての。

「千葉くん、ガンバレー」

「勝彦ー、トップバッターなんだからデカイの打ちな！」

無茶言わないでくれお二人さん！　こちとらバットを

——バンツ！

「へ？」

「ストライーク！」

「かあつひこお！　何ボーッと突っ立ってんのよ！　シバキ倒すわよ！」

「千葉くん、ボール見てボール！」

おいおい、どう見ても初心者の俺に容赦なく投げてきたよ。

——バンツ！

「ストライーク！」

「くっ」

間髪いれず投げられたボールに、俺は何の反応も出来なかった。キャッチャーミットに収まったボールを見つめる。これじゃあ思考に浸る暇もないじゃないか。

こうなったらウダウダ考えるのは止めだ。

飛んできたボールを、ただ無心に叩く！

「たまには俺だってッ！」

ヒュン！

ブンッ！

バンッ！

「ストラック！ アーウトッ！」

「……………」

「勝彦！ 掠りもしないってどういうことだぁー！」

「どんまいどんまい。次があるよー」

俺は、今回も戦力にならなさそうだ。

＊ ＊ ＊

しょんぼりと肩を落として帰ってくる千葉くんに入れ替わるように、私はバッターボックスへと向う。宮原副部長に厳しい言葉を投げつけられる千葉くん。その肩をポンツと叩く。ドンマイって。

「さーて、打つぞー」

千葉くんの敵討ちって分けではないけど、ちょっとイラッらしってるんだよね。

「初心者相手にポンポン投げちゃって……」

そこまでして私が欲しいのかな？

二、三回素振りをしてバッターボックスに入る。相手のピッチャーは私よりも頭一つ背が高い。一七五cmくらい？ だから何だって話だけど、どうもやりにくい。

「いや違うな」

この胸の奥から沸々と湧き上がるこの感情は……

「怒り……かな」

赤く煮え滾る、久しく感じていなかったこの感覚。最後に感じたのはいつだっただろう。まあどうだっていいや。

「ようは打てばいいんだよね」

グリップを握りなおし目を閉じ深呼吸を一つ。無理矢理に気持ちいを落ち着ける。こんなにささくれ立った気持ちじゃ打てる球も打てないもんね。

「さあ、こーい！」

気合十分。

体調良好。

準備万端。

「ぶっ潰してアゲル♪」

しかしボールは思いもよらないところへ飛んで来たのだった。

＊ ＊ ＊

「クソッ、やられたわ」

北村の打席が終わった後、隣に座っていた沙耶加先輩が忌々しげに呟いた。

「やられましたね」

そう返す俺。鏡を見ないと分からないけど、今の俺は苦虫を噛み潰したような顔をしているだろう。

今の北村の打席は見事なまでのフォアボール。キャッチャーが立ち上がりこそしなかったけど、コースは明らかにボールだった。つまり女子ソフト部は北村と勝負する気が無いということで、となると、残る俺と沙耶加先輩が打つしかない。打つしかないんだが、

「あたしが気張るしかない……か」

「うう、すみません」

悲しいかな俺では得点に絡めないで、必然的に沙耶加先輩が打つしかなくなるのだ。

「別に勝彦が悪いわけじゃ………ないわよ」

「何ですか今の間は!？」

「さ~て打つか」

「はぐらかされた!？」

バッテリーボックスへ向う先輩。くううう、こうなったら守備で名誉挽回するしかない。

こんな俺の決意も、予想外の形で空回りするのだった。

＊ ＊ ＊

「先輩。作戦うまく行きましたね」

「まだ試合は終わっていない。気を抜くんじゃないよ」

そう忠告し、私は安全メットを被り直す。

現在試合は六回の裏、女子ソフト部の攻撃だ。一アウト満塁でスコアは六対〇、私たち女子ソフト部が圧倒的に勝っている。

まあ勝っていて当然なのだ。普通に考えて、文化部が運動部に勝つことはありえない。

先程後輩の言っていた作戦というのはいわば保険のようなものだったのだが、まさかこれほどまでに効果を表すとは正直思っていなかった。

「しかし、此处で気を抜いてはならない」

この点差に安心していると、どんなミスを仕出かすかわからない。失敗が失敗を呼び、気がついた時には負の連鎖が出来上がっていたなんて事はよくある話だ。

「私たちは絶対に負けられない」

全ては北村美代というあの生徒を手に入れるために。

そして――

そして――

* * *

「これはどーいうことだよ！」

七回の表、カガク部チームの攻撃。

沙耶加先輩が打席に入ってる間、俺は六人の女子生徒達を詰問していた。ちなみに北村は一塁に出ている。

「幾らなんでもエラーしすぎだ！ それでもソフトボール部の一員なのか！」

これまでの守備を思い返しても明らかに不自然だった。簡単なフライを取れなかったり、ボテボテのゴロを取れなかったり、送球・捕球ミスしたり。

俺だって他人の事は言えないけど、こいつらは腐っても女子ソフト部の一員だ。それなのにあんな初心者がするようなミスを連発されると、もうわざとやっているんじゃないか思えない。

「ことと次第によっちゃあ、ただじゃおかねえからな！」

俺だって珍しく怒り心頭だ。しかも沙耶加先輩にこいつ等をベとくように言われたから、事と次第によっちゃ容赦はしない。

そうやって睨みを利かせていると、右端にいた一番背の低い奴がポツリと呟いた。

「アンタだってエラーしたくせに……」

その一言が波紋のように六人に伝染していき、ワンテンポ遅れて

「そうだそうだー」

「他人の事言えないじゃんよー」

「自分のことは棚に上げて」

「サイテー」

などなど、口々に俺を罵り始めた。

「う、うるさい！俺は初心者だからしかたねえだ……ろ………」

ん？

なんか今、とても大事なことを口にしたような……？

もしかしてこいつ等……いや、まさかな。

「それなら、私たちだって怒られる理由なんかないわ！」

「！」

その言葉を聞いて、自分の考えが現実味を帯びてきた。

「君たちってもしかして……初心者？」

「「「「「だったらなによ！」」「」「」「」

瞬間、俺の頭の中でカチリという音がした。

なるほど、漫画やドラマで探偵が謎を解いたときの感覚ってこんな感じか。何というか、晴れやかでスツキリとした気分だ。

しかし一泊遅れてブチリという音がしたかと思うと、先程までの

晴れやかな気分は何処へやら、心の奥から怒りのマグマが噴き出てきた。

なるほどそういうことか。

だったらこっちだって容赦はしない。いや、してはいけない。

「ちょっと！　なに黙ってんのよ！」

そんな非難もなんのその。俺はベンチまで走っていくと、自分のバッグから携帯電話を取り出し、ある人物に連絡を取る。

「……よし」

パタリと携帯電話を閉じ、レンタルメンバーに、そして相手チームに目を向ける。

そうだよ、いつまでも相手の土俵で戦ってやる必要なんて無いじゃないか。

俺たちはカガク部だ。なら、カガク部らしく戦おう。

「本当の勝負はこれからだ！」

この勝負、絶対に負けられない。

カガク部 v s 女子ソフトボール部 ? (後書き)

ご意見、ご感想、お待ちしております。

カガク部 vs 女子ソフトボール部？

副部長がフオアボールで、千葉くんがデットボールでそれぞれ出塁したので、レンタルの子に代走を頼み私はバッターボックスへと向っていた。これで満塁。私と勝負しなければ押し出しで一点入ることになるけど、これだけリードされてるんだ。きっと一点くらいとまた勝負を避けるだろう。

「タイムお願いします」

途中、千葉くんがタイムを取って私のほうへ駆け寄ってきた。

「北村、頼みがある」

真剣な表情から、彼に何か策が在るのだと感じた。この状況を打破するとしておきの策。

相手に聞こえないよう、私に顔を近づける千葉くん。視界いっばいに映る彼にちよっとドキドキしたことは秘密だ。

「この打席、打てるだけファールを打ってくれないか？」

「全部？」

「ああ。しかもただのファールじゃない。場外まで吹っ飛ぶくらいどでかいファールだ」

「えっ？」

正直、意味が分からなかった。無理矢理にでもホームランを打って言うんならまだ分かるよ。でも、どこの世界に『場外ファール打ちまくれ』なんて指示出す人が居るのよ。

「ボール球打つのってけっこう難しいんだからね」

でも、これは私にしか出来ない仕事だ。千葉くんもそう思ったからこそ私に指示を出したんだよね……。

「ならその役目、しっかりこなして見せようじゃない！」

期待は倍返し。

それが私のポリシーだから。

* * *

北村美代が打席に立った。打ち合わせどおり、ピッチャーはボール球を放り投げる。押し出しで一点入ることになってしまいが、そのくらいは想定内だ。カガク部の攻撃は後一回で点差は六点。そう簡単に点差が埋まることは無いだろう。

「おっと、いかんいかん……」

心のどこかで安堵している自分に気づき、慌てて首を振ってその考えを振り払う。

最後まで気を緩めるなど言っておきながら自分が気を緩めるとは。私もまだまだ修行が足りんな。

カキーン

「なに!？」

響くはずの無い金属音に思わず後方を振り返る。

雲ひとつ無い空を白い点がまっすぐに横切っていく。白球はぐんぐん飛距離を伸ばし、グラウンドを囲むネットを越えていき、しまいいには見えなくなった。

「ファール!」

なんて打力だ。ボール球をあんなに遠くまで飛ばすとは……。

カキーン

カキーン

カキーン

カキーン

北村美代は自棄になっているのか、投げる球全てに手を出しネットの外まで運んでいた。数打てば当たるというわけでもないだろうに。

「ほ、欲しい……」

カキーン

ポツリと漏れた声。そうだ、彼女さえいれば――

カキーン

カキーン

カキーン

カキーン

カキーン

カキーン

カキーン

カキーン

カキーン

カキーン

……

……

……

ファールの嵐はベンチに置いてあった予備のボールが無くなるまで続いた。

＊ ＊ ＊

「タイム！」

北村と入れ替わりで打席に立った沙耶加先輩が、空降って早々にそう宣言した。ちなみに北村には三振になってもらった。納得はしなかったが、これも策戦の内だとなだめ沙耶加先輩のいた二塁に

入ってもらおう。

「ここで助っ人を呼ぶわ。いいでしょう？」

安全メットに確認を取ると、

「カガク部員であるなら誰であろうとかまわないが……」

とやや戸惑い気味な安全メット。きっと『投入できる人材がいるならなれもつと早く出さなかつたんだろう？』とか考えてるに違いない。

別に最初からこの手を考えてなかつた訳じゃないんだ。相手が正々堂々挑んで来るのなら、俺たちだって普通に相手してやつたんだけどさ。

「これは争奪戦で、総力戦なんだ」

欲しい者の為に全力でぶつかってくる相手に手加減なんてしたら、そりゃあ失礼というものだろう？

俺たちだってアイツを、北村を守るために全力を尽くさなきゃならないよな。

別に女子ソフト部の奴らが使ってきたセコい手にイラついてるわけじゃない。

仕返しとかそんな小さいことはコレッポッチも考えてないからな！

「じゃあ、助っ人の登場といきましようか！」

おっと。いつの間にか交渉が終わっていたよ。

「わがカガク部の助っ人は、この人だあ！」

先輩の指差す方向に、ここにいる全員が視線を向ける。これだけの人数が一斉に同じ方向を向くなんてそうそう出来るもんじゃないけど、それはもうシュールな光景だった。

「やは」

視線の先に現れたのは、何を隠そう我らがメガネ先輩だった。

金色に輝くマイバット片手にひょっこり現れたメガネ先輩。カガク部以外の面々が啞然としている中、白衣を翻し意気揚々とバツターボックスに立ち、

「さあこーい！」

なんて楽しそうに言うものだから、女子ソフト部の皆さんは反応に困ってらっしゃる。

まあそれも仕方無いこと。見るからに運動の出来なさそうな素人然とした構えで素振りを繰り返すメガネ先輩。誰がどう見ても勝利のキーマンだとは思えない。

「さあ！ 試合再開といこうじゃない！」

再開される試合。

放たれたボール。

響く快音。

作戦通りに事が進んだことにニヤリとしながら、俺はホームベースを踏んだ。

＊ ＊ ＊

宮原君の一言で再開された試合。女子ソフト部の皆さんは初めこそ戸惑っていたけど、今では落ち着きを取り戻していた。投手にいたっては余裕の表情でこっちを見ている。あ、なめられてるなめら

れてる。

そして第一球目。ストライクゾーンのと真ん中へものすごい速さで飛んできた。

「わーお、速い速い」

相手ピッチャーが『どうだ、打てるもんなら打ってみろよヘッポコ野郎』ってな顔をしている。

ふっふっふ。僕自身はいくらなめても良いけど、

「カガク部はなめちゃいけないよ」

続く第二球。タイミングを合わせてバットを振るう。打つつもりは無い。コースを読むことも、配球を考える必要もない。

振りぬく。

必要なことはたったのそれだけ。

カキーン

「それだけで楽々ホームラン」

打球が遙か彼方へと飛び去っていくのを確認したあと、そつと地面に持参したバット『ガンガン打とうぜバット君（三号）』を置いて歩き出す。生まれて初めてのホームランだ。ゆっくりと戻って来ましようか。

途中、千葉君がニヤリと笑っているのももちろん見逃さなかったし、北村君の驚いた顔も脳内カメラでバッチリ撮っておいた。

「さあ、大逆転劇の始まり始まり」

* * *

助っ人としてやってきたメガネ先輩が場外ホームラン。開いた口が塞がらないとは良く聞く表現だけど、まさか実際に体験することになるとは思わなかったよ。

「ねえ千葉くん！ あれってどういうことなの！？」

早速千葉くんに聞いてみる。一気に点差が縮まったけど、どうにも納得できないんだ。だってメガネ先輩、どう考えても素人だよな？

「ああ、あれね」

ニヤニヤしながら帰ってきた千葉くん。その顔ちよつと怖いよ。

「あれは先輩の力じゃなくて、先輩の使ったバットの力だ」

「バットって、あの金色のやつ？」

「そうそれ。あのバット、市販の物をカガク部で改造したやつなんだ。見た目は普通だけどあの中にはカガク部特性の――」

「勝彦。あんたの番近いんだから準備しときな――」

「おっと。解説はまた後で」

そう言い残してバッターボックスへと駆けていく千葉くん。途中で例の金色バットを拾ったのを私は見逃さなかった。

「一発かましてやる！」

これまでかすりもしなかった人の台詞とは思えないほど自信に満ちた声。これだけの自身があるのなら、きっと打ててしまうんだろう。あれはきつと。それだけ凄いバットなんだ。

カキーン

「うそ……」

隣に居るレンタルの子が驚愕の声を上げた。そりゃそうだよね。私だってちょっと信じられないもん。千葉くんが場外ホームラン打つなんてさ。これは絶対に聞かなきやいけない。じゃないと気になつて夜も眠れないよ。

「まったく、どんな手品を使ったんだか」

ニヤリと笑う千葉くんの顔はなかなか魅力的で、少しだけ、ほんの一瞬だけ、私は見とれてしまっていた。

* * *

「そんな……バカな……」

メガネが助っ人として現れてから、試合は一方的なものとなってしまった。作戦通りならこちらの一方試合で勝負がつくはずだった。なのに、なのに、

「何だこの点数は！」

これだけの点数差を付けられては反撃する気力も起こらない。事実、打たれる度に選手たちの表情に諦めが満ちていったのだから。

「先輩……」

チームの仲間が声をかけてくる。後輩に心配をかけてしまうとは。それほど暗い顔をしていたのだろうか？ していたのだろう。

「どうした？ まだ試合は終わっていないぞ」

私は淡々とそう返す。いや、こう返すしかなかった。

「ですけど……」

何かを言いたげなその表情を見て、私は彼女の言いたいことを悟った。そして、どうやらそれは、他の選手たちも同じようだ。なぜなら、全員が同じような顔をしていたのだから。

「どうする？ まだやるかい？」

まるで見計らったかのように投げかけられる質問。カガク部の副部長である彼女は、きつとこうなる事を分かっていたのだろう。

「いや。もう止めておくよ」

悔しいが、こちらの負けだ。いくらがんばっても、この点差をひっくり返せるとは到底思えない。

「そう言うと思ったよ。じゃあ」

そういうと、彼女は、グラウンド中に響くような声でこう言った。

「ゲーム、セーット！」

＊ ＊ ＊

閉会式も兼ねた終わりの挨拶。お互いに一列に向かい合っていたとき、それは起こった。

「北村美代！ 女子ソフト部に入ってくれ！」

安全メットは突然そう言って、北村に向って土下座をした。それはもう見事なまでの土下座で、見る者の胸を打つような光景だった。

「え、ええっと……」

「ちょっと！ 約束が違うじゃない！」

オロオロする北村と、逆に詰め寄る沙耶加先輩。

「勝負はアタシたちが勝ったんだから、どんなに頼まれても美代は渡さないわよ」

「そんなことは分かっている。だがしかし、私たちには彼女が必要なんだ！」

「あんたねえ……」

言い争う二人の後ろでは、どうしたらいいのか分からない風な北村が、必死になって仲裁の言葉を探している。

「部に入ってくれとわ言わない。だがせめて、試合の時だけでいい！ 彼女の力を貸してほしい！ それなら良いだろう！」

次第に悲壮感の増していく声。それはまるで、欲しいオモチャを買ってもらえず、買って買ってと泣き喚く子供のように。

「そんなこと言われても勝負は勝負。負けたんだから、美代の力はあてにしないで、自分たちでがんばりな」

「そこを何とか！」

「だーかーらー」

もう、我慢の限界だった。

「あの！」

あまりのいたたまれなさに、二人の会話に割って入る。

「アンタたち……貴女はどうしてそこまでして北村に拘るんですか？」

俺は単刀直入に聞いた。頭を下げてまでしてアイツを欲しがらる理由を。イカサマ勝負に負けて、それでも北村が欲しいと土下座までして、そんなに悔しい思いをしてまで北村が欲しい理由を。

「私は、どうしても先輩たちを、今の三年生を、全国大会に連れて行ってあげたいんだ」

大地を握り締め、声を震わせながら言葉を紡ぐ安全メット。

「そのためには、北村美代。彼女の力が必要なのだ！」

その瞳には次第に涙が溜まっていき、ポツリポツリと乾いた地面に染みを作っていく。

「だから……………たのむ……………」

そう言って頭を下げる安全メット。その姿に向けられた幾つもの視線。その中で最も大切な人達からの視線を、きっと彼女は感じていない。

当然だ。現実から目を背け、こんな風に背中を丸めている奴なんかが感じるわけが、分かるはずがない。

彼女を見つめる、他の女子ソフト部員の気持ちなんて。

「アンタ、本当に分かってないんだな」

きっと彼女たちは分かっている。安全メットが間違っていることを。

「北村を入部させて、北村の力で全国に行っても、その先輩たちはきっと喜ばない！」

俺は言ってやった。ああ言ってやったさ。

「一人の力で手に入れたものより、みんなで頑張って……部員全員で努力して手に入れたものの方が、嬉しいに決まってるだろうが！」

俺の言葉にはっとなって顔を上げる安全メット。

「仮に北村の力で全国に行けたとしても、そりゃあ先輩たちは喜んでくれるだろうよ」

でもな、先輩だけじゃないんだよ。

「けどアンタたちはそれでいいのか！　今まで一緒に頑張ってきたんだろ！　だったら自分たちの力で全国に連れて行ってやろうとか思わないのかよ！　野球ってのは一人でやるスポーツじゃない。九人で……いや、もっと沢山の人数でやるんだよ。そこには敵も味方も、観客だって応援してくれる人たちだって含まれてる！」

それを言うならほとんどのスポーツがそうだけど、今は女子ソフ

ト部の問題なので細かいことは気にしない。このバカの目を覚ませるためには、これくらい言ってやらなきゃダメなんだよ。

大切なのは結果？

終わりよければ全て良し？

結果オーライ？

そんな言葉はクソ食らえだ！

中身の伴わない結果なんて、答えを見ながらテストを受けるようなものだ！

「そんな結果なんて！ 無意味で！ 無用で！ 無価値だ！」

「くう……」

再び俯き方を振るわせる安全メット。これは、俺の言葉が届いたって、そう解釈していいんだな？

俺の思いが一〇〇%安全メットに届いているかは分からないけど、そもそも言葉にしなきゃ伝わらない。思ってるだけじゃ伝わらない。赤の他人なら特に。

「そうじゃなきゃ寂しいだろ。先輩も、アンタも、他の部員たちも！」

そこまで言って、深呼吸を一つ。言うべきことは言った。でもこの言葉は、本当なら背後に居た女子部員たちが言うべきだったんだ。

「そんなあんた達なんか、北村を渡してたまるか！」

最後に一言そう怒鳴ったあと、俺はカガク部のみんなの方を向く。

これ以上は俺の、いやカガク部の知ったことじゃない。

「北村、先輩、行きましょう」

「う、うん」

俺たちは踵を返しグラウンドを後にした。

部外者はこの辺で退散するでしょう。

「ちょっとサービスが過ぎたんじゃないのかい？」

「え？ 何のことですか沙耶加先輩？」

「サービス？」

「ホームランってなかなか気持ちのいいものだね」

やるべきことはやったし、言うべきことも言った。

あとは彼女たち次第だ。

俺たちの背後には、メガネ先輩がバットを引きずった跡が、一本の線となって残っていた。

＊ ＊ ＊

女子ソフト部との勝負から数日後、学校に続く坂道を歩いていると、少し先に千葉くんを見つけた。

雑誌を読みながらゆっくりと歩いている千葉くん。よっぽど集中して読んでいるのか、周囲からの痛い視線に気づいていない。

歩く早さを少しだけ上げたらすぐに追いついたので、いつものように挨拶。

「やっほー、千葉くん。この坂道はいつも斜面が急だね」

「盆地だからな。そう簡単に地形が変わってたまるか」

千葉くんはそれだけ言うと、またすぐに雑誌を読み始めた。

「千葉くん？　もしもーし、千葉くーん？」

女の子が並んで歩いて話しかけてるのに、なにその反応の薄さ。
その雑誌は私よりも面白いっていうの！？

何をそんな熱心に読んでいるのか気になったので、千葉くんの後
ろから覗き込むように雑誌を見る。

『手編の極意　く魂の秘伝書く』

まさか雑誌に多少の敗北感を感じるとは思わなかったよ。

『女の子と並んで一緒に登校する……それが男のロマンって奴だ！』

何日か前にお兄ちゃんがそう言ってたのを思い出す。千葉くんは
そうじゃないのかな？

それからいろいろと話しかけてみたけど、「ああ」とか「うん」
とか適当に相槌を打つだけで一向に顔を上げようとしなない。

そんな事をしているうちに校門が見えてきた。花が散り緑に染ま
った桜の木が一本、そよ風に揺れている。まるで門をくぐる生徒達
に挨拶をしてるみたいだ。

「千葉くん、学校に着いたよ」

「そうか、なんか早いな」

そこでようやく雑誌を閉じカバンにしまおう千葉くん。これでやっとまともな会話が出来る。

「ねえ、千葉くん」

「ん？ どうし……」

カキーン

どこからとも無くそんな音が聞こえた。音のした方向を見ると、女子ソフト部の皆さんが朝連に励んでいた。

「あれって女子ソフト部？」

「みたいだな」

数日前の駆け試合の様子が脳裏に蘇る。安全メットを被った人の涙は、数日たった今でも鮮明に覚えてる。千葉くんのお説教（？）のあと彼女たちがどうなったのかを、私たちは知らないんだよね。さっさと帰っちゃったから。

でも、ああして練習に励んでいるってことは、きっといい方向で

まとまったんだよね。みんな目が輝いてるような気がするよ。

「ガベッ!？」

「ち、千葉くん!？」

突然、千葉くんが奇声を上げながら倒れた。

「だ、大丈夫千葉くん!？ 何があったの!？」

仰向けに倒れた千葉くんの頭部付近に白いボールが転がっている。拾い上げてみると、それは野球ボールよりも一回り大きく重たい、ソフトボール用の球だった。

「最近こんなんばっか……」

頭を抑えながら起き上がった千葉くんは、どこか遠い目をしてボールを見つめている。

「すみませーん、ボールとってくださいーい」

グラウンドのほうから声が聞こえたので、持っていたボールを放

り投げた。放たれたボールは一度も地面に触れる事無く女子ソフト部の人のグローブに納まった。

「ナイスキャッチ」

その人は驚いたように目を見開いて私のほうを見た後、深々と頭を下げて練習へ戻っていった。

「何をあんなに驚いてたんだろうね？」

「お前って、ホント運動部泣かせだよな……」

「それってどういう意味？」

「そのまんまの意味だ。別に悪口でもないよ」

むしろ褒め言葉。そう言い残して千葉くんは校舎へと歩き出した。

「あー、ちょっと待ってよー」

置いて行かれそうになったので慌てて追いかける。

「もー、置いていくなんて酷いよー」

追いついてみると、千葉くんはおでこの右側をさすっていた。どうやらそこにボールが当たったようだ。

「わりー北村。俺保健室よってから行くわ」

向きを変えて保健室のある第二校舎へと走り出そうとした千葉くんの腕を、反射的に掴んで引き止める。

「わっとな、何だよ北村？」

「えっと……」

ここ数日、ずっと言いたかったことがある。

毎日部室で会ってるのに、なぜか言い出せなかったんだ。家路に着くたびに、私の意気地なしくて自分で自分を叱ってた。

でも、今なら言える。今だからこそ、千葉くんに言うことが出来る。

「千葉くん……この前はありがとう……」

ゆっくりと、だけどしっかりとした声で、精一杯の思いを込めて、言葉を紡ぐ。

「あの時の千葉くん、すごく……かつこよかったよ」

言い切った瞬間、ものすごい恥ずかしさが込み上げてきた。

ヤバイ、何これスゴイ恥ずかしい！

「じゃ、じゃあ、お大事にっ！」

恥ずかしさに耐え切れず、言いたいことだけ言って目も合わせずに走り去る。

あーあ、変な奴だと思われちゃったかな？

私は顔を真っ赤にしながら、一年校舎に向けて全速力で走っていく。

だから、千葉くんが私以上に顔を真っ赤にしていたことなんて、その時の私はまったく分からなかったのだった。

＊ ＊ ＊

トゥルルルル トゥルルルル トゥルルルル

ピッ

「はいもしもし」

《あ、宮原?》

「ああ……………木下か?」

《なによその間。なんで疑問系なのよ。一応はおんなじクラスなのよ?》

「いやーさっきまで寝てたもんだから……………ZZZ」

《寝るなああああああ!!》

「じよ、冗談よ冗談。本気で寝るわけ無いじゃん」

《……………》

「で、今回はなんの用?」

《いや、用ってわけじゃないんだ。宮原にお礼を言いたくて》

「お礼? あたしなんかしたっけ?」

《この間の試合のことよ》

「ああ、あれか」

《ごめんね。ウチんとこのが迷惑かけたみたいで》

「ごめんも何も、けしかけたのはあたしとアンタでしょーが」

《そうだけど、あんなに大事になるとは思って無くて……》

「もう済んだことだし、今になって謝られても困るってーの」

《でも……》

「それに、後輩たちも生まれ変わったようだーって言ってたのはアンタよ？」

《だけど……》

「だああああ！ でもでもでもうるさい！ 駄々っ子かアンタは！」

《!?!》

「カガク部は新作の性能チェックが出来た！ 女子ソフト部はメンバーの心が一つになった！ 良かった良かった！ オーケー？」

《オ、オーケー》

「ならこの件はこれで終了！」

《……宮原ってさあ》

「なによ」

《ううん、なんでもない》

「なによ、気になるじゃないの」

《別になんでもないって》

「そう」

《……ありがとね》

「どーいたしまして。またなんかあったら相談しなよ、時と場合に
よっちゃあ力になるからさ」

《ははは。じゃあそのときは、頼りにさせてもらいますよ》

プッ

ツー ツー ツー

「おう、まかしときな」

カガク部 v s 女子ソフトボール部 ? (前書き)

ちよつと長くなったので、?の後書きには載せませんでした。

カガク部 vs 女子ソフトボール部？

【本日の発明品、大・解・説！】

北村「本日の発明品はこれ『ガンガン打とうぜバット君（三号）』
！」

千葉「うわっ、まだ続くんだったこのコーナー」

北村「今回は、金色に輝くこのボディに包まれた謎を、ズバツと解説しちゃおう！」

千葉「あー、スルーですかー？」

北村「さあ千葉くん！ 解説お願いします！」

千葉「丸投げかよ！」

北村「丸投げだよ！」

千葉「たくもう。じゃあパパッと説明するから、分からないことがあつたら質問するよーに」

北村「はい」

千葉「ではではこのスティック、簡単に説明すると【超強力磁場発生装置】だ」

北村「分かりにくいわ!!」

千葉「まあまあ。グリップのところに『S』って書いてあるだろ？」

北村「あ、ホントだ。気がつかなかった」

千葉「コレはこのバットに内蔵されたカガク部特性超絶磁場発生装置が、『今S極の磁場を発生させてますよー』って意味なんだ」

北村「S極……あ、分かった！ 磁力の反発する力でボールを飛ばすんだね！」

千葉「ご名答」

北村「でも、ボールは磁場なんて発してないよ？」

千葉「そこで登場するのがこれ『白球は青空の彼方君』！」

北村「ただのボールだよね!？」

千葉「ところがどっこい。こいつにも小型化された磁場発生装置が内蔵されているんだ」

北村「コレにも!？」

千葉「S極の磁場を発生させながら飛んでくる彼方君を、同じS極の磁場を持つバット君で打ち返せば、たとえバットに当たってなく

ても、簡単に観客席まで飛ばすことが出来るのさ!」

北村「うわぁ。……でもどうやって相手に投げさせるの?」

千葉「そんなの簡単だ。北村にファールばかり打ってもらっただろ? それで予備のボールが尽きたときに補充と偽ってすり替えたんだ」

北村「この悪党!」

カガク部 v s 女子ソフトボール部 ? (後書き)

ご意見、ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1260o/>

カガク部！

2011年10月6日22時29分発行